

# ミステリ読書案内

2022. 10. 23 発行元

第409号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 月原渉「九龍城の殺人」

9月に新潮文庫nexから月原渉の『九龍城の殺人』が出た。本格ミステリらしい題名でもあり、帯にも「禍々しき密室連続殺人」と書いてあったので、期待して読んだ。少しずつ上達してきていることは実感できる。

### 「昔」のミステリの雰囲気

新潮文庫nexから出ているので、一見、若い読者層を狙った「キャラクター風」に見えるのだが、私にはどの作品を読んでも「古ぼるしさを感じるミステリ」だと思ってしまう。デビュー作の『太陽が死んだ夜』については下の囲みに取り上げたが、新潮文庫nexから出ている『使用人探偵シズカ』シリーズも1950年代の日本探偵小説の雰囲気を感じるのだ。

作者・月原渉は私よりずっと若い世代。でも、作品の舞台の多くが現代ではなく、明治時代だったり戦中・戦後関連だったり時代がかっているせいもある。そして、物語の目指すものが「昔形式」なんだなと思ってしまう。

### 1980年代の香港が舞台

本書の舞台は1980年代の香港と書いてある。香港の九龍地区には暗黒街があり、官憲の力が及ばない特別な世界が待っている。主人公はアラガキ・フー(新垣風)。香港の女系コミュニティ・フォンジェンの

トップであるシェリーの孫娘。母親と日本で暮らしていたのだが、母が亡くなったので、その言いつけに従って香港を訪ねることに。

空港に迎えに来ていた又従妹のシャクティと出会い、二人の冒険が始まる。フォンジェンの組織も、九龍城の隠された動きもすべてが不気味な展開に結びついていく。フーは貧民窟で奉仕活動をしていたホンファを助けるために城に向かうが囚われの身に。そしてそこで密室殺人が起きるといふ流れ。

### 目指すものは冒険物語

おどろおどろしい舞台設定で、主人公は次々と窮地に追い込まれる流れ。江戸川乱歩の少年ものとは言わなければ、ハラハラドキドキの冒険ものの雰囲気が強い。

「本格もの」「密室殺人」が謳い文句に挙げられているが、その要素は二の次になっている気がする。密室に関しても、トリックというよりは論理で煮詰めていく形になっている。月原作品の多くで、このロジック運びにスッキリ感がないのが弱点になってしまっている。

### 月原渉・作品リスト

1. 太陽が死んだ夜
2. 世界が終わる灯
3. 月光蝶 NCIS 特別捜査官
4. 黒翼鳥 NCIS 特別捜査官
5. 火祭りの巫女
6. 使用人探偵シズカ  
横濱異人館殺人事件
7. 首無館の殺人
8. 犬神館の殺人
9. 鏡館の殺人
10. 炎舞館の殺人
11. 九龍城の殺人

上記の作品リストの6番以降が新潮文庫nexから出ている作品で、題名からすると「本格もの」真っ向勝負のメッセージが伝わってくる。でも、期待ほどの満足感に至らないのは、ロジック部分にギクシヤク感が残るからだろうと思っている。冒険もののねらいに力が入り過ぎるのも関わっているかもしれない。作者の思いや願いは十分に伝わって来るのだけれども。

### 次作に期待する部分として

比較的若い読者向けの新潮文庫nexに「本格もの」路線の作品が入ることは非常に重要である。そういう意味で次作にも期待を寄せている。「館もの」でトリック満載のミステリが望みだ。思い切った昔ながらの大人の名探偵を創造するのもよいかもしれない。

### 『太陽が死んだ夜』

2010年東京創元社。鮎川哲也賞受賞作品。月原渉のデビュー作品となる。本書の巻末についている選評を読んでも、『このミス』のコメントを見てもそれほど高い評価ではなかった。トリックそのものの成立について疑問を投げかける意見もあったようだ。

プロローグに出てくるのは第二次世界大戦中のニュージーランドの捕虜収容所の場面。ここである日本兵の謎の死が提示される。本章に入って舞台は1984年のニュージーランド・クライストチャーチのラザフォード女子学院になる。「わたし」として登場してくるのは十五歳の少女・ジュリア・グレイ。親友のバーニイと一緒に全寮制のこの学校に入学する。ジュリアの手元には祖母が遺した41年前の記録があった。プロローグに書かれた事件の数か月後に起きたこの学校の教会堂での殺人事件についてである。ということで、現在起きたものと過去に繋がる3つの出来事の謎を解明するのが中心の内容である。兵士の名前に設定があって連想もはたらくが、前半に抱く期待感から見ると後半の解決は尻すぼみの印象。主人公の描き方など、ある程度の物語性はできているのに「本格もの」の部分が今ひとつ。この特徴はその後の作品にも通じるものがある。